

未成年犯罪の傾向と背景に関する一考察

新田 泰隆 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)
指導教員 中藪 伸二

キーワード 犯罪, 未成年, 発達障害

1. 緒言

現在のわが国では、減少傾向ではあるが、未成年による犯罪は相次いで発生している。そこで、未成年者による犯罪が最もピークに達した1983年から現在までの事件に焦点を当てる。未成年による犯罪の現状を理解したうえで、人間関係、生活環境などを詳しく調査し、犯罪を引き起こした未成年者の傾向や背景要因を分析し、課題や対策を考察する。教職を目指すために、今後、教育現場で子どもを指導する場面などに活かそうと考え本研究を行う。

2. 研究方法

未成年による犯罪に関する文献やインターネットでのデータを参考に研究を進める。未成年による犯罪が最もピークに達した1983年から現在までの事件からいくつかピックアップし、その事件に至った引き金、傾向と背景要因を詳しく調べ、課題や対策を考察する。

3. 結果と考察

1983年以降の未成年による犯罪は図1の通りである。

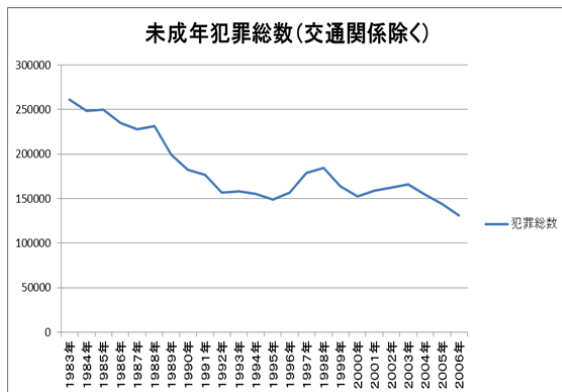


図1 未成年による主要罪名別検挙総数
1983年以降の未成年による犯罪を調査した結果、以下のような背景要因が考えられる。
・学校に関する要因として、人間性の教育の欠

如、人間関係、いじめ、学力重視の風潮。

・家庭に関する要因として、家庭環境(極貧、両親共働き、離婚)、暴力、過保護、放任、厳しい教育、突然の家族の死。

・文化に関する要因として、仮想世界の影響(小説、映画、漫画、テレビゲーム)、メディアの影響(テレビ、雑誌、インターネット)。

・その他の要因として、加害者の人格、過去の事件を模倣、発達障害、孤独感、ストレス。

上で挙げた4つの要因のいくつかが重なった場合に犯罪が起こりやすいと考えられる。その他の要因である「発達障害」の子どもによる犯罪も少なからずみられた。ここで確認しておきたいのは、発達障害の子どもが犯罪を起こしやすいと直結させないことである。

4. まとめ

教師は対応力や指導力、ぶれない人間性などさまざまな能力が求められる存在であると実感した。学校側、家庭側だけで解決しようとした結果、子どもが犯罪を起こしてしまった例もあった。子どもが家庭にいるときの様子などを保護者としっかりと情報交換していき、連携していくことが大切であると考えられる。そして、教師は子どもひとりひとりの個性を理解し、子どもの変化にも対応できるように、子どもとコミュニケーションをとる事が大切であると考えられる。

引用・参考文献

草薙厚子(2010) 大人たちはなぜ、子どもの殺意に気付かなかったのか。ドキュメント・少年犯罪と発達障害。イースト・プレス。
裁判所職員総合研修監修(2012) 重大少年事件の実証的研究 ～親や家族を殺害した事例の分析を通して～。司法協会。